



Title	加賀谷先生を送る
Author(s)	濱口, 恒夫
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1996, 6, p. 322-323
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99733
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

加賀谷先生を送る

濱 口 恒 夫

月並みな言葉であるが、本当に「光陰矢のごとし」である。

今年3月末をもって加賀谷先生が停年を迎えられ、大阪外大を去られる。先生は、私にとっては名実ともに「先生」であったし、いまでもそうである。1961年に先生が東大から赴任して来られたとき、私はインド語学科の学生であった。当時のインド語学科はちょうど教官の世代交代の時期で、古賀勝郎先生や内田紀彦先生（現園田学園女子大学）が就任されたばかりであった。両先生ともヒンディー語が専門で、そこにウルドゥー語担当として加賀谷先生が加わられた。ウルドゥー語だけでなく、パキスタン文化、さらにイスラムにも詳しい先生だということで、学生のあいだには「新風」を感じた者が多かった。卒業後数年して私が大阪外国語大学に戻って来たとき、「新風」は着実に吹いていた。

先生の在任中に、インド語学科は、インド・パキスタン語学科となり、現在の地域文化学科の南アジア地域文化専攻へと変貌を遂げた。学科内（旧）では、ヒンディー語とウルドゥー語の2コースが置かれるようになり、授業科目も語学・文学・文化・政治経済の4分野（いわゆる「四本柱」）が整えられた。先生を中心に、学内に学科（旧）を超えたアジア研究会（現アジア太平洋研究会）が1970年代初めに結成され、確実に活動の輪を広げて今日に至っている。1981年度、82年度には先生を代表として特定研究費プロジェクトが組織され、研究成果としてそれぞれ『現代アジア社会の研究』、『現代アジア政治における地域と民衆』が刊行された。

学外では、既存学会とは別に、1960年代後半からインド・パキスタン研究会（現南アジア研究会）が、関西の研究者や一般市民の参加を得て活動した。かつて研究者とし海外調査に出掛けるのがまだ困難だった1970年代後半期に、大阪市

立大学経済研究所、大阪府立大学、同志社大学の研究者とともに文部省助成でインド・パキスタン海外学術調査を組織することができたのも、こうした活動があったればこそである。さらに付け加えるならば、現在全国的学会として活動している日本南アジア学会の源流も、実はここに辿ることができるのである。

先生の多数の研究業績に関する国内外の評価については、多言を要しないであろう。同じ学科・専攻にあって身近にご指導いただいた者としては、かつて先生に他大学から招聘の話があった際、大阪外大のウルドゥー語コースの存続のためまげて転出を翻意していただいたことなど、種々お礼申しあげるべきことは尽きない。先生は目下客員教授タバッスム・カーシュミーリー先生とウルドゥー語辞書を編纂中と聞く。

ますますお元気で、停年退官後もなお変わることなきご指導をと念じつつ。